

臨地実習における感染予防に対する看護学生の認識

東谷みゆき¹ 小村三千代²

¹ 独立行政法人国立病院機構東徳島病院附属看護学校；〒779-0193 徳島県板野郡板野町大寺字大向北1-1

² 国立看護大学校

higashitani@higashitokusima.hosp.go.jp

Recognition of Nursing Students on Prevention of Infection in Clinical Practice

Miyuki Higashitani* Michiyo Komura

*National Hospital Organization The Nursing School Attached To Higashitokushima National Hospital ; 1-1, Ootera, Itano-cho, Itano-gun, Tokushima, 〒779-0193, Japan

[Abstract] The purpose of this study is to clarify the recognition of nursing students on the prevention of infection in clinical practice. The results from semistructured interviews indicated that clinical instructors and teachers should understand that the prevention of infection is affected by the relationship between patients and nurses and that raising awareness of preventing infections is important for students.

[Keywords] 臨地実習 clinical practice, 感染予防 prevention of infection, 看護学生 nursing students, 認識 recognition

I. はじめに

看護基礎教育では、感染を予防する方法として、滅菌手袋の装着・ガウンテクニック・手洗い方法を教授している。臨地実習施設が肝臓疾患の専門病院である場合は、看護学生(以下、学生とする)がC型肝炎(以下、HCVとする)患者の援助を実施する機会が多い。このような学習環境のなかで学生が援助を実施する際、手に傷がある患者に足浴を実施したが大丈夫なのかという相談を、実習終了後に受けたことがあった。その体験から、患者あるいは学生自身に感染の危険性があった場合、学生がどのような認識のもとに感染予防をとるのかということに疑問を感じた。

先行研究によると、実習中の血液接触状況は清潔ケアや剃毛時が多く、それを感染性の血液と確認した学生の約60%が看護教員または実習指導者に報告し、その後の対策の指示を受けていた¹⁾。また、実習前の感染予防対策に関する研究もされていた²⁾。しかし、臨地実習上で、学生が感染予防をどのように認識しているかに関する研究は見当たらなかった。そこで今回、臨地実習でHCVのある患者に援助をする学生の、感染予防に対する認識を明らかにすることで、教育方法の示唆が得られるのではないかと考えた。

II. 研究目的

臨地実習において、HCV患者の援助を実施する学生の感染予防に対する認識を明らかにする。

III. 用語の定義

認識：感染予防時に看護学生が意識したこと、とする。

感染予防：HCV患者の援助時の手洗いや手袋の装着、体液に素手で触れないことをさす。

IV. 研究方法

1. 研究参加者

HCV患者の援助を実施したことがある看護学生(3年課程3年生)6名。

2. 研究期間

平成14年7月～平成15年7月

3. データ収集方法

半構成的面接法を用いた。

面接に関しては、研究者が、面接は、個室で1人ずつ対面式に座り実施した。学生の同意を得てテープレコーダに録音をし、同意が得られなかった場合はメモすることの同意を得、終了後内容の確認をした。また、インタビューガイドを作成しプレインタビュー後修正した。

その主な内容は、①患者の身体的状況、②感染予防の内容、③援助中、感染予防に関連することで困ったこと、④感染予防を実施する際に影響したもの、とした。

4. 分析方法

- 1) 面接内容を逐語的に記録した。
- 2) 逐語録を繰り返し熟読した。
- 3) 逐語録の内容のなかから、学生の認識と思われる文脈を抽出した。
- 4) 複数の参加者が繰り返している文脈を抽出しコード化した。
- 5) コードの類似性と相違性を抽出し、意味のまとまりでサブカテゴリー化した。
- 6) サブカテゴリー化した内容の整合性を確かめた。
- 7) サブカテゴリーの抽象度をあげ、カテゴリー化した。
- 8) 分析のすべてにおいて、看護研究指導者のスーパービジョンを受けた。

5. 倫理的配慮

- 1) 昼休み時間、教室に在室している学生に研究の趣旨および研究参加は自由であることを説明した。
- 2) 研究者が部屋に在室している時間を学生に伝え、自由に訪問してもらった。
- 3) 訪室した学生に文書を用いて、いつでも研究参加を取りやめることができ、成績評価にはいっさい関係のないことを説明した。
- 4) 匿名性、秘密の厳守、研究以外には使用しないことを説明した。

6. 学生の学習背景

学生は、臨地実習前には、基礎看護学で「安全・安楽」、「感染防御技術」を、疾病治療論で「肝炎」、「感染症」を、成人看護学で「肝炎のある患者の看護」を終了している。また、受け持ち患者決定時に、担当教員より、HCV患者であること、体液の付着や処理には留意し、手洗い、手袋装着の感染予防をすることと、病棟師長からも実習初日に同様の説明を受けている。

V. 結果

臨地実習における、HCV患者援助時の感染予防に対す

る学生6名の認識を分析した結果、3つの認識があることが明らかになった。その内容は、①感染予防をする学生の認識、②感染予防がとれない学生の認識、③感染予防をとらない学生の認識だった(表1)。

1. 感染予防をする学生の認識

感染予防をする学生の認識には、「手洗いをすればいける」や、「援助前にHCVとわかっていた」があった。

1) 「手洗いをすればいける」

学生は、便が手に付着した場合、イソジンで手洗いをすれば大丈夫であるという認識を持っていた。たとえばAさんは、「便がついたなって、イソジンで消毒したらいける」と、イソジンで手洗いをしていた。

学生はまた、便が手に付着しそうな場合でも、付着しなければ大丈夫と認識していた。これは、HCVが血液感染であるということ、排便は上手に処理をすれば、学生自身に付着しないからという理由であった。Bさんは「便とか付着しなかったんで、付着しなきゃいい」と排泄援助後は、石鹸で手洗いをしっかりしたと語った。

また、下肢に褥瘡がある患者の足浴時に浸出液がついた場合、学生自身に傷がなければ大丈夫であるという認識を学生は持っていた。Aさんは、手袋を装着し足浴を実施していたが、手袋がずれることがあった。「自分に傷とかもなかったから、ちょっとついたぐらいではいけるわ、何とも思わなかった」と足浴終了後はイソジンで手洗いをしたと話してくれた。また、この時、Aさんは、「手を洗うまでは、他のものには触れないように」との認識をもっていた。これは、浸出液が付着しているかもしれないという可能性がある場合は、自分自身が媒体とならないような感染予防を考えた認識と思われる。また、石鹸でなくイソジンで手を洗うのは、臨地実習での感染予防マニュアルに基づき、イソジンで手洗いを実施するよう指導を受けていたからであった。

2) 「援助前にHCVとわかっていた」

学生は、実習開始前に受け持ち患者の診断名がHCVであることを知り、HCVに関する知識を持っていた場合、手袋を装着して援助をしなければならないと認識していた。Cさんは「受け持ち患者様がC型肝炎だとわかったので、手袋を装着するようにしました」と言っていた。

また、剃毛や排泄援助を実施する前に、援助時は手袋を装着するよう実習指導者や教員から指導を受けた場合、手袋を装着するという認識を持っていた。学生は「C型肝炎があるから、援助をする時は手袋を装着してください」と援助前に指導を受けた場合は、手袋を装着して援助していた。

また、患者に痂皮化した傷があり、出血の危険性を感じた場合、その部分には直接素手で触れないようにしてい

表 1 「臨地実習における感染予防に対する看護学生の認識」の分析結果

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
1. 便がついたなって、イソジンで消毒したらいける 2. 便とか付着しなければいける 3. 傷がなければ、浸出液が少しついてもいける。何とも思わなかった	手洗いをすればいける	
4. 受け持ち患者さんが HCV とわかっていた 5. HCV なので、援助する時は手袋装着するようにしてください 6. 傷がいっぱいあった患者さんで血が出るような時もあったので、傷に触れないようにした 7. 排泄援助時、途中で看護師さんが装着してるのに気づいて装着したほうがいいか確認した	援助前に HCV とわかっていた	感染予防をする学生の認識
8. カサブタになっている傷が気になった 9. 出血もない HCV 患者の清拭に手袋装着するのはおかしい 10. 粘稠痰をとった時、気になった 11. 下痢便で気になった	気にはなるけど、おかしい	
12. 足先に傷があり戸惑った 13. 足に傷があったので、迷いました	援助中、傷に気づき戸惑い、迷う	
14. 患者が変に思ってしまう 15. 汚いものでも扱っているみたいで	患者に対する遠慮や配慮	
16. 自分で計画した行動の時には困らないが、看護師さんが来て、急に援助をする時 17. 看護師さんがバタバタ急いで、忙しそうにする時 18. 援助の準備ばかりに気が行って、手袋まで気がいかなかった 19. 患者さんに援助することにいっぱい感染のことは考えなかった	予定していない援助は、困る、ついていけない、余裕がない	感染予防がとれない学生の認識
20. 清拭の時、手袋しなくていいと言われた 21. 看護師さんには、いけるって言われた 22. 手袋もらったら、悪いかと思った 23. 看護師さんに言えない雰囲気 24. 看護師さんが来たら、早くしないとって思って、取りに行けない 25. 何か、急げ、急げ、早くって思ってしまった	看護師に合わせる	
26. 傷のない皮膚だったから、大丈夫 27. 見た目傷がなかった 28. 出血もないような身体を拭くのに手袋は装着しない	傷がない	感染予防をとらない学生の認識
29. 感染の指標は、血液とか体内から出るもの 30. 血液から感染する 31. 感染経路が血液、浸出液や唾液は軽く考える	感染源は血液である	

た。Dさんは「傷がいっぱいあった患者さんで、痂皮化していて、すぐに血が出るような時もあった」と言い、「傷に触れないようにし、実施後手洗いをした」と語った。また、援助中に看護師が手袋を装着しているのを見て、HCVであると気づいた場合は、手袋を装着したほうが良いか、その場で看護師に確認していた。Aさんは、「排泄の時、自分が手袋を装着するのを忘れて、途中で看護師さんが装着しているのに気づいて」手袋を装着をしたほうがいいか看護師に聞いたと語った。

以上のことから、学生は、HCVの血液の付着がなく学生自身に傷がなかった場合、手洗いを実施するという感染

予防の認識をもっていた。また、援助実施前・実施中にHCVの患者であると認識した場合は手袋を装着するか、あるいは看護師にHCV患者であるとの確認後、手袋を装着するという認識をしていることがわかった。

2. 感染予防がとれない学生の認識

感染予防がとれない学生の認識には、「気にはなるけど、おかしい」、「援助中に傷に気づき戸惑い、迷う」、「患者に対する遠慮や配慮」、「予定してしていない援助は困る、ついていけない、余裕がない」、「看護師に合わせる」があった。

1) 「気にはなるけど、おかしい」

学生の認識は、痂皮化した傷をもつ患者の皮膚を見た際、手袋を装着したほうがいいのかどうか気になっていた。Fさんは、傷の接触から感染したらどうしようという不安があり、「清拭しているときに、乾燥してカサブタになっている傷があって気になってしまっ」と思いながら、素手で援助をしたと述べた。これは、出血がないHCVの患者の清拭に手袋をするのはおかしいという理由からである。また学生は、患者によって、手袋を装着したりしなかったり、援助方法を変えるのはおかしいと認識していた。

口腔内清潔援助時に、義歯に付着した粘稠痰を素手で取り除くことが気になっていたCさんは、「粘稠痰をとった時、気にはなっていたんだけど、手袋を取りに行くことはできなかった」と語った。CさんはHCVは血液感染で、唾液には触れても大丈夫という理由から、手袋の装着をしておらず、粘稠痰が付着したからといって、手袋を装着するのは、患者自身に汚いものを扱っているからと思われるのではないかと、急に手袋を装着するのはおかしいという認識もあった。またAさんも、排泄の援助時に、気になるが、手袋を装着していなかった。これも患者が汚いものとして扱われていると思ってしまうのではないかと理由から、「下痢のような便で、気にはなったが、手袋は装着できなかった」と語った。

2) 「援助中、傷に気づき戸惑い、迷う」

学生は、援助の途中で患者の足に傷があると気づいたとき、どうしていいのかわからなくなり、感染予防がとれない場合があった。Cさんは、「足先に傷があったので、戸惑いました」や、「HCVの人の足を清拭した時に足に傷があったので、どうしようってすごい迷いました」と語り、援助の途中で小さい傷に気づいたが、なぜ急に手袋を装着するのか、患者自身に傷に直接触れるのを嫌がっていると思われたくない、また、手袋を装着するという学生の言葉で患者を傷つけてしまうのではないかと理由から、素手で援助をしていた。

3) 「患者に対する遠慮や配慮」

学生は、清潔援助や排泄援助を実施する場合、手袋を装着し患者に触れることに対して、汚いものでも扱っているみたいと患者自身が思ってしまうのではないかと、失礼なことではないだろうかとの認識を持っていた。Dさんは、他の患者と同じように援助しなければ、患者が変に思ってしまうとの理由から、「清拭の時、患者さんに手袋を装着しますって言えなかったです」と語った。Cさんも、HCVがあるから手袋を装着するのは、患者に対して失礼との理由から、「汚いものでも扱っているみたいで、手袋が装着できない」と語った。また、Cさん、Dさんも、排泄援助時に、汚いものにとってもらって悪いとか、身体を拭いてもらって気の毒という言葉患者から聞いていたので、ただ

でさえ患者は学生に気を遣っているのに、手袋を装着することで、汚いものという患者の言葉を肯定するのではないだろうかという意味でとらえていた。

4) 「予定してしていない援助は、困る、ついていけない、余裕がない」

学生は、行動計画の中で計画した以外の援助が急に看護師と共に実施された場合、手袋を装着する余裕がないと認識していた。Aさんは、「自分の計画上で実施している時は大丈夫だった。自分が計画した上での行動の時には困ることはないが、看護師さんが急にきて、援助をっていうとき」と語り、Bさんも「バタバタ急いだ時、手袋っていう余裕はなかった。看護師さんが忙しそうにするから、ついていけない」と語っていた。手袋を装着しようと思っても、援助が始まってしまっているため、手袋を準備している間に援助が終わってしまうかもしれない、また援助を中断できないということから、待ってくださいと言いつけないことが、感染予防がとれないことに結びついていた。

また、学生は援助をすることに精一杯で、物品を揃えることが優先し、感染症について考える余裕がなかった。Bさんは「援助の準備ばかりにいて、手袋までに気持ちがいかなくなった」や、「患者さんに援助することにいっばいで、自分に感染することとか考えなかった」と語っており、患者への援助を実施することを優先して考えるため、手袋の準備の余裕がないということが明らかになった。

5) 「看護師に合わせる」

学生は、看護師から手袋装着の必要がないと言われた場合、感染予防がとれないことがわかった。Dさんは「清拭の時は、患者さんも気になさるから手袋しなくていいですって看護師から言われました」や、「最初から、看護師さんにはいけるって言われてた」と語った。また、看護師が「学生は援助時にすぐ手袋を装着する」と言っていたのを聞いたという理由から、手袋の装着ができないという雰囲気を感じていた。Eさんは、「清拭で、病棟に手袋をもらったら、悪いかと思った」と語り、Aさんは、手袋の準備を看護師に伝えることで、見学しておくようにと言われたことがあるという理由から「看護師さんに言えない雰囲気」と語った。

学生には、看護師と一緒に援助を実施する場合、援助を早くしなければという認識があった。Aさんは「看護師さんが来たら、早くしないとって思ってしまった、取りに行けない」や、「何か急げ、急げ、早くって思ってしまった。その場にいたら、何もしないで立ってるのは、ちょっと。何かしなくてはとって思ってしまったね」と言っているように、看護師と共に援助をする際は、看護師の動きやスピードに合わせてようとして、手袋の準備ができなかった。

以上のことから、学生は、感染予防をしたほうがいいのか

ではないかと思いながらも、患者への遠慮や患者を傷つけてしまわないかとの認識から、感染予防がとれないことがわかった、また、看護師と共に援助を実施する場合には、看護師の言うことに従い、援助のスピードも合わせていることが、感染予防がとれないことに結びついていた。

3. 感染予防をとらない学生の認識

感染予防をとらない場合の学生の認識は、「傷がない」、「感染源は血液である」があった。

1) 「傷がない」

学生は、視覚的に傷がない場合、手袋の装着はしなかった。Eさんは「患者さんは傷してなかったし、自分もなかった」と言い、Aさんは「傷のない皮膚だったら、大丈夫」、Bさんは「見た目に傷がなかった」や、「出血もないような身体を拭くのに手袋は装着しない」と語った。明らかに傷がないと学生が認識した場合、学生は感染予防をとらなかった。

2) 「感染源は血液である」

学生は、感染経路が血液であると認識していた場合、手袋の装着はしていなかった。Cさんは「浸出液とか、血液が出てるわけじゃない、感染の指標は、血液とか体内から出るもの」と言った。Aさんは「血液から感染する」、Bさんは「口腔内ケア時も、出血はなかったから大丈夫」、また「感染経路が血液っていうのがあった。浸出液や唾液は軽く考える」と語った。これは、文献には血液感染と記載してあるため、浸出液や唾液の感染性は低いのではないかという理由からであった。

以上のことから、感染予防をとらない学生の認識は、患者に傷がないことや、血液が感染源であるという根拠に基づいたものであった。

VI. 考 察

分析結果から、学生の認識には違いがあることがわかった。これらの認識の違いがなぜ生じるのかについて考察する。

1. 感染予防をとる学生と、とらない学生の認識の違い

感染予防をとる学生と、とらない学生の認識の違いは、排泄物や、浸出液、血液等の体液付着の可能性の認識の違いに影響を受けていると考えられる。感染予防をとる学生の認識には、便が付着しそう、付着したとの認識から、体液付着の可能性があると判断した結果、手洗いを実施するという感染予防に結びつくと考えられる。しかし、感染予防をとらない学生の認識は、傷がないと視覚的に確認し体液付着の可能性はないと判断している。このことが素手で援助

を実施することにつながっていると考えられる。

また援助内容によっても、感染予防に違いがあると考えられる。たとえば、感染予防をとると答えた学生の援助内容は、排泄の援助であり、汚物の処理という認識のもと、手洗いという行動につながっていると考えられる。一方、感染予防をとらないと認識した学生の内容は清潔援助であり、傷のない皮膚を拭くのに、学生は手袋の必要性はないと判断している。このことから、清潔援助で、体液付着の可能性が考えられない場合は、素手での援助に結びつくと考えられる。したがって、感染予防の学生の認識の違いは、体液付着の可能性や援助内容に影響を受けていると考えられる。

さらに、感染予防をとる認識・とらない認識のどちらにも看護師による関わりがみられ、その関わり方によって学生の行動に違いがみられた。看護師や教員が援助前にHCVの情報を提供し、手袋の装着の必要性を指導した場合には、学生は手袋の装着をしていた。しかし、HCV患者に手袋を装着した援助の必要性はないと看護師に指導された場合には、学生は手袋の装着をしなかった。したがって、看護師の関わりは学生にとって実践行動に結びつく強い影響力があると思われる。

2. 感染予防をとる学生と、とれない学生の認識の違い

学生は、援助前に援助する患者がHCVであるとの情報を得ていると、手袋を装着して援助を実施していた。しかし、学生は援助内容の確認ができなかったり、急に援助が始まった場合は、感染予防がとれなかった。このことは、学生が自分の計画以外の援助を実施しようとした場合、思考の混乱が起こっていると推測できる。このことから、実習指導者および教員は、学生の学習プロセスに混乱を生じさせない指導の必要があると思われる。

3. 感染予防がとれない学生の認識

感染予防がとれない学生は、体液が付着するかもしれないという認識をもっていたが、その行動は患者や看護師との関係が学生に影響を及ぼしていたのではないかと考えられる。

1) 患者と学生との関係

学生は、体液付着の可能性を認識しながら、手袋を装着して援助することに違和感を感じ、感染予防がとれない場合があった。それは、他患者と援助方法が違うことで、患者を傷つけてしまわないか、患者が変に思わないだろうか、患者を嫌がっていると思われたくないと語っていることから、手袋装着が患者との関係に影響を及ぼすと考えているのではないかと考えられる。猪股³⁾は、患者に対して学生は「好意的でない感情を持たれることへの不安がある」と述べている。学生は、体液付着の可能性から手袋を装着し

なければならない認識を持っていたが、患者との関係を良好にしていきたいという思いがあるので、手袋装着は適切でないと判断していたのではないかと考える。

2) 看護師と学生との関係

学生は、看護師の言動を察し、状況に応じた行動をとっていた。なぜなら、学生は看護師の指導を受け、看護師から評価される立場にあった。学生の看護師から良い評価を得たいという思いが、その場の看護師の状況に合わせるという行動につながっていたのではないかと考えられる。

4. 実践への示唆と今後の課題

学生が初めて HCV 患者に援助を実施する際は、実習指導者や教員が演示し、次に学生と共に段階を踏んで実施することで、感染予防を意図的に意識づけることが重要と思われる。また、学生の感染予防に対する認識は、患者および看護師との関係が影響していることを実習指導者と教員が共有し、関わっていく。

今後は、学生の感染予防にかかわる実習指導者および教員の認識や、指導方法を明らかにしていくことが課題である。

VII. 結論

臨地実習において、HCV 患者援助時の感染予防に対する 6 名の学生の認識を分析した結果、以下のことが明らかになった。

1. 感染予防に対する学生の認識は、感染予防をとる学生の認識、感染予防がとれない学生の認識、感染予防をとらない学生の認識、があった。

2. 感染予防をとる学生の認識には、「手洗いをすればいける」「援助前に HCV とわかっていた」があった。

3. 感染予防がとれない学生の認識には「気にはなるけど、おかしい」「援助中に傷に気づき戸惑い、迷う」「患者に対する遠慮や配慮」「予定してしていない援助は困る、ついていけない、余裕がない」「看護師に合わせる」があった。

4. 感染予防をとらない学生の認識には、「傷がない」「感染源は血液である」であった。

謝辞 本研究に参加者してくださいました 6 名の学生の皆様に、心から感謝申し上げます。

本研究は、日本看護学教育学会第 14 回学術集會にて一部を発表した。

■文献

1) 蒲池千草, 他: 看護学生に対する感染症対策; 臨床実習に

おける血液等の接触状況, 聖マリア学院紀要, 66, 1999.

- 2) 平塚志保: 看護学生の实習前における感染予防対策に関する調査, 第 31 回日本看護学会論文集(看護教育), 66, 2000.
- 3) 猪股昌子: 看護学生と受け持ち患者の人間関係形成過程とその要因, 第 30 回日本看護学会論文集(看護教育), 147, 1999.
- 4) 浅原益子, 他: 看護基礎教育における手洗い教育のあり方演習前後手指汚染状況の調査報告, 看護教育, 44(3), 245-247, 2003.
- 5) 重久加代子: はじめての臨地実習で経験したケアの本質受け持ち患者と学生を結ぶもの, 看護教育, 44(2), 104-110, 2003.
- 6) 藤岡高弘, 他: 特集最新! C 型肝炎治療とケアの基本 Q & A, エキスパートナース 19(4), 31-68, 2003.
- 7) 板橋繁, 他: 特集 ナースに求められる感染予防対策, 臨床看護, 28(10), 1457-1459, 2002.
- 8) 高野八百子, 他: 焦点 実践できる感染対策; エビデンスからの学びと活用, 看護技術 48(7), 773-776, 2002.
- 9) 深澤佳代子: 看護学生教育における感染対策, INFECTION CONTROL, 11(3), 270-274, 2002.
- 10) 大東恭子: 針刺し事故の予防および対策, INFECTION CONTROL, 11(2), 31, 2002.
- 11) 吉田祐子: 病棟における HCV 持続感染者の取り扱い, INFECTION CONTROL, 11(2), 44, 2002.
- 12) 川村佐和子, 他: 感染管理に関するガイドブック, 日本看護協会, 2001.
- 13) 洪愛子, 他: 焦点 感染対策は新時代へ! ; ナースが防ぐ院内感染, 看護技術, 47(4), 17-24, 2001.
- 14) 源河いくみ, 他: 医療従事者への感染対策; 針刺し事故など, INFECTION CONTROL, 10(4), 334-338, 2001.
- 15) 看護系大学における小児看護学実習の実態; 安全対策, 教員の負担や困難, 実習評価について, 日本看護学教育学会誌, 10(4), 11-19, 2001.
- 16) 伊藤道子: 手指汚染細菌の検出を経験した看護学生の感染看護に対する考え方の変化, 第 31 回日本看護学会論文集(看護教育), 63-65, 2000.
- 17) 藤井昭: ディスポ製品とコスト, INFECTION CONTROL, 8(10), 63-65, 1999.
- 18) 佐々木美奈子, 他: 医療用手袋の役割と限界 看護職の健康を守るバリアとして, 看護研究, 32(4), 313-322, 1999.
- 19) 松澤洋子, 他: 看護学生の各種免疫抗体保有状況から考えた今後の感染予防対策, 第 29 回日本看護学会論文集(地域看護), 51-53, 1998.
- 20) 森下路子, 他: 看護学生の B 型肝炎感染予防対策に関する調査報告, 日本公衆衛生学会誌, 45(1), 67-71, 1998.
- 21) 今村桃子, 他: 看護学生に対する感染症対策; 実習中の血液などによる感染の危険性とその対策, 第 54 回日本公衆衛生学会誌, 42(10), 980, 1995.
- 22) 高橋泰子, 他: 院内感染に関する看護研究を現場でどう生かすか, 看護研究, 27(4), 269-275, 1994.

【要旨】 本研究は、臨地実習における看護学生の感染予防に対する認識を明らかにすることを目的に行なった。研究方法は半構成的面接法を用い、研究参加者は、C型肝炎患者の援助を実施したことのある看護学生(3年課程3年生)6名だった。その結果、感染予防に対する学生の認識には、1. 感染予防をする学生の認識、2. 感染予防がとれない学生の認識、3. 感染予防をとらない学生の認識、があることが明らかになった。1. には、「手洗いをすればいける」、「援助前に HCV とわかっていて」が含まれていた。2. には、「気にはなるけどおかしい」、「援助中に傷に気づき、戸惑い、迷う」、「患者に対する遠慮や配慮」、「予定していない援助は困る、ついていけない、余裕がない」、「看護師に合わせる」があった。3. としては、「傷がない」、「感染源は血液である」があった。 学生が体液付着の可能性を認識しながらも、感染予防がとれなかったのは、患者や看護師との関係が影響を及ぼしていた。患者との関係では、手袋装着が負の影響を及ぼすのではないかと考えていたからと思われる。また、看護師との関係では、学生は看護師に評価される立場であるため、その場の看護師の状況に合わせる行動につながっていたと思われる。今後は、学生の感染予防が患者および看護師との関係に影響していることを理解し、感染予防がとれない学生に対してその認識を実習指導者と教員が共有し、関わることが求められている。
